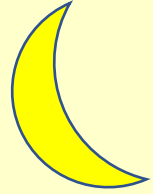


朔太郎と「写真」



萩原朔太郎は中学時代にカメラを手にして以来、写真撮影に熱中しました。とりわけ愛好したのは、2つのレンズを持ったカメラで撮影し、のぞき眼鏡で立体的な画像を見る「立体写真(ステレオスコープ)」でした。現代では3D写真はよく目にしますが、今から100年以上前の日本では珍しく、彼は友人から「何だそんな玩具みたいなもの」と軽蔑されたそうです。

朔太郎が撮影した写真には、道、川、線路など、遙か彼方へと続いてゆく風景が多くみられます。前景から後景へとゆっくり視線を移しながら立体写真を眺めていると、まるで「長い時間の持続している夢」(「僕の写真機」)を見ているような錯覚を覚えます。彼は「僕はその器械の光学的な作用をかりて、自然の風物の中に反映されてる、自分の心の郷愁が写したいのだ。」(同前)と述べています。それらの写真には、故郷を眼前にしても満たされることのない、痛切な郷愁をうたう彼の詩との深い共通性が感じられます。



朔太郎撮影立体写真「大森付近」(前橋文学館蔵)